

2024年12月29日 礼拝説教要旨

ヨハネによる福音書講解説教20「救いの実り」

ホセア10：11～12、ヨハネ4：31～38

サマリアの人々が、続々とイエスさまのところに集まってきました。その光景を見ながら、イエスさまは弟子たちに「あなたがたは『刈り入れまでまだ四か月もある』と言っているではないか。わたしは言うておく。目を上げて畑を見るがよい。色づいて刈り入れを待っている」（35節）と言われます。「刈り入れまでまだ四か月もある」は、ある種のことわざのようですが、四ヶ月も待つ必要はない。ほら、もう刈り入れの時がきているではないか。そのようにおっしゃるのです。

なぜ、ヨハネ福音書は、サマリア人の女性の物語の中に、このような弟子たちとの対話の物語を挟み込むのでしょうか。それは、イエスさまとサマリアの女性の出会いを他人事にするのではなく、弟子たちの物語、わたしたちの物語とするためであります。これから弟子たちは伝道に遣わされ、イエスさまを宣べ伝える。そして真実に礼拝すべきお方、イエスさまを人々に紹介するのです。それは単に肉体的な喉の渇きを潤すようなものではない。その場しのぎの、その時だけの救いではありません。永遠の救いに関わることなのです。「永遠の命に至る実を集める」（36節）そこに教会の伝道の目的があります。わたしたちはそのことに気づいているでしょうか。単なるこの世の事柄で満足しようとしていないでしょうか。

振り返れば、サマリアの女性も、最初、井戸から汲む水で満足しようとしていました。それで渇いた魂も癒されると思っていた。でもどんなに水を飲み続けてもその渇きは癒されませんでした。イエスさまは女性に言われました。「この水を飲む者はだれでもまた渇く。しかし、わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。」（13～14節）女性は、最初それをバカにして、そんな便利な水があるなら「主よ、渇くことがないように、またここに汲みに来なくてもいいように、その水をください」（15節）と言います。けれどもイエスさまと出会い、真実に礼拝すべきお方と出会った時に、その魂の渇きは癒されました。弟子たちもまたその魂の救いのために働く者として召されているのです。ではその養いはどのようにしてもたらされたでしょう。

弟子たちは食べ物を買うために町に行っておりました。食べ物を調達してきたので、イエスさまに「どうぞ食事をしてください」と言ったのです。それはあくまでも肉体の養いとしての食事です。しかしここでイエスさまは、イエスさまが与える霊的な食事、魂の養いについて教えておられます。これはサマリアの女性との対話で言えば、「水」のことに対応しています。単なる喉の渇きを癒す水ではなく、永遠の命に至る水。それをイエスさまはくださいます。

食べ物もまた、水と同様、人間が生きていく上では欠かせないものですが、イエスさまの与える食べ物は、食べたらずかお腹がすくような食べ物ではなく、永遠の命を養う食べ物です。永遠の命、それは永遠なるお方、神さまとのつながりに生きる命と言ってもよいでしょう。そのつながりに生き続けるための養いです。人間は、罪ゆえに神さまとのつながりを失っていました。この神さまとのつながり、関係を回復させるためにイエスさまはご自身をまことの食べ物として与えられたのです。そのことはこの後、第6章のところでも「わたしは命のパンである」（6：35、48）と教えられます。さらに「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる」（6：54）そのように約束なさいま

す。それは、言うまでもなく魂の養いは、イエスさまご自身が十字架でその命をささげられたことによって与えられました。

そのことに関連して、34節で「わたしの食べ物とは、わたしをお遣わしになった方の御心を行い、その業を成し遂げることである」とあります。その御心は、まさに十字架において表されました。イエスさまは、ゲッセマネの園で「わたしの願いではなく御心のままに行ってください」(ルカ22:42)と祈られて十字架におかかりになられました。十字架に神さまの御心があります。またここには「成し遂げる」という言葉がありますが、これはイエスさまの十字架上での最後の言葉でもあります。ヨハネ福音書は、十字架のイエスさまの言葉として「渴く」(19:28)と「成し遂げられた」(19:30)を伝えています。十字架による罪の赦しは、まさに神さまの御心であり、その御業をイエスさまは十字架で成し遂げてくださいました。そのようにご自身が渴かれ、ご自身が命をささげられて、わたしたちの魂を養ってくださいます。ここにわたしたちを養うまことの食べ物があります。

その養いを表す食事として、教会が大事にしているのが聖餐です。カルヴァンは聖餐について、それは「靈的饗宴であって、そこではイエス・キリストがわたしたちに対し、御自身が生けるパンであること、わたしたちの魂はそれによって養われて、その中で憩い、至福の不滅へと至ることが示されている」(『キリスト教綱要』)と述べています。今年のクリスマスには5件の訪問聖餐がありました。コロナ禍以降、病床聖餐、訪問聖餐は難しかったのですが、今年は比較的多く行うことができました。ある方はコロナの前から4年以上聖餐に与っていませんでした。みなさんとても喜んでおられました。そこにはまさに靈的な養い、魂の養いがあるのです。存在そのものがその養いを欲している。教会はその養いをこそ提供していかなければなりません。そこに教会の存在意義があります。

今日のところを読みながら、ヨハネ福音書が伝えます御言葉「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ」(12:24)を思い出しました。イエスさまは一粒の麦としてこの地に蒔かれました。それがクリスマスです。そしてやがて十字架で死んでくださいました。地に落ちて死んでくださった。そのようにして多くの実りをもたらせてくださいました。だからわたしたちはその刈り入れをすればいい。「そこで、『一人が種を蒔き、別の人刈り入れる』ということわざのとおりになる」(37節)

わたしたちは今、イエスさまの労苦の実りにあずかっています。イエスさまが命をささげてわたしたちと真実に出会われた。命をささげてまことの礼拝すべきお方と出会わせてくださった。そこに人生最大のことがあります。わたしたちは、その救いの実りにあずかる。その養いを受ける。わたしたちはそれで十分なのです。そのことのために教会はこの地上に存在しています。この収穫のために新しい年も仕えてまいりましょう。

天の父よ。イエスさまがご自身の命を蒔かれ、永遠の命に至る実りをもたらせてくださいました。わたしたちはただその実りを刈り入れるばかりです。その刈り入れを待つ者に気づくことができますように。また世にある教会がそのためにいよいよお仕えすることができますように導いてください。主の御名によって祈ります。アーメン。